

蕪栗沼・渡り鳥の越冬地を観察

山の自然学クラブ／中村華子

日 程：平成30（2018）年10月13日・14日（第204回講座中の観察会）

場 所：蕪栗沼およびその周辺水田（ラムサール条約登録湿地）

案 内：戸島 潤氏（特定非営利活動法人蕪栗ぬまっこくらぶ）

宮城県には北部平野部の直径15 kmほどの圏内に「伊豆沼・内沼」（1985年登録）、「蕪栗沼および周辺水田」（2005年に登録）、「化女沼」（2008年に登録）の3つのラムサール条約登録湿地があります(図-1)。たくさんの渡り鳥が集まっていて観察しやすいこともあり、蕪栗沼は人気のあるスポットとして知られています。沼の一带はかつて湿地状の環境でしたが、伊達藩時代から北上川の大規模な河川改修などとあわせ新田開発や舟運の開発が進み、用水路・排水路として何キロメートルにもわたる水路が築造されたそうです。また蕪栗沼周辺は明治に新迫川が開削されたことで大規模な新田開発が進んだそうです。

なお、2015年6月6日に三陸講座の中で見学した長根貝塚はちょうどこの蕪栗沼から旧迫川を3 kmほど下流に下った場所にあります。付近にある中沢目貝塚、恵比須田遺跡などと同様、古松島湾の内陸部に位置していて縄文時代前期～中期に海岸線の後退によって淡水化が進んだことがわかっています。平野部は長年かけて堆積した沖積土であり、豊かな土壌が形成されたことが理解できます。田尻の恵比須田遺跡から出土した重要文化財の遮光器土偶がたいへん有名です。

渡り鳥の観察地として知られている蕪栗沼は日本有数の越冬地です。国の天然記念物に指定されているマガンのうち国内に飛来する半数が利用しているとも言われています。夏季にユーラシア大陸北部などで繁殖し、冬季は日本列島にきて越冬する渡り鳥であるコクガン、マガン、ヒシクイはいずれも生息数が減少し、1970年代に天然記念物に指定されました(表-1参照)。宮城県北部では、マガン等渡り鳥との共生と越冬地の分散化を目指して、稲刈り後の田んぼに水を張って沼のような環境を作る「ふゆ

みずたんぼ」という取り組みが、周辺の農家の協力を得て進められています。

蕪栗沼では「蕪栗ぬまっこくらぶ」が沼周辺の保全・管理を担っていらっしゃいます。

ホームページ <http://kwcp.simdif.com/>

ぬまっこくらぶさんは、1996年に活動を始められ、現在NPOとして渡り鳥の調査、清掃活動、環境教育、堤防や観察路の管理などを行なっています。水位の調節、周辺環境の整備など多岐にわたる重要な役割を担われています。講座実施の少し前にご連絡申しあげたところ、ぬまっこくらぶの戸島様が、現地でご案内下さいました。今の時期に一番観察しやすいという場所を教えてください、みんなでお話を伺いながら鳥がやってきましたるのを眺めました。その間、戸島さんから鳥の生態に関するお話を伺い、たくさん質問をさせて頂き、楽しく観察ができました。

マガンは、夜は沼で休息し昼は水田で食事をしていきます。どんどん飛来数が増えるこの時期は鳥の動きもまだ様々のようで、棲み分け、昼と夜の居場所



図-1 周辺地図 ○印が蕪栗沼・周辺水田の場所
(宮城県自然保護課「ラムサールトライアングル」マップに加筆)

の変化など、伺ってみるとなるほど鳥たちもいろいろな人生(??)を過ごしているのだなと実感します。きっと個性も豊かなのでしょう。よく観察している方だからこそわかることが多いと感じました。

細かい季節変化や天候によって昼間に出かけるところが変わる、また時期による風向きの変化に応じて居場所、飛び立つ方向が変わるそうです。渡ってきた鳥の種類や数の変動によって、それぞれがねぐらにする場所を変えることも伺いました。

今の風向きで鳥たちが通るといふ方向で待っていたので、たくさんの鳥が頭上を飛び交うのを見ることができました。

この時期は田んぼに落ち穂が落ちているので、それを鳥たちは楽しみに食べに行くようで、雁たちは昼間に食事を、鴨たちは夜に食事をするので、ちょうど日暮れと夜明けに交代するのだそうです。夕暮れにガンがねぐらに戻ってきて空は大騒ぎになります。そして、鴨は群れをなして飛び立っていきます。朝はその逆。うーん、うまくできているねえ... と、一同感心したのですが、戸島さんによれば鴨が夜行性になったのは、夜が特に好きだからではないようで、人間が昼間に活動している(つまり、狩猟で取られてしまう)ので、それを避けて行動しているのだそうです。彼らは夜でも飛行や生活に問題ない視力を持っているそうです。なので、休猟時期は各地にバラバラにいる鴨ですが、狩猟期に入ると一斉に保護区内に移動してくるのだそうです。

・・・ヒトとトリとの関係、深いお話を聞かせていただきました。



ぬまっこくらぶでは、観察した速報値を Web サイト、Twitter で発表なさっています。以下、観察会前後のご報告をそちらから引用させていただきます。

「10月7日の蕪栗沼はマガン約3,700羽、ハクチョウ類4羽、カモ類5,140羽でした。シジュウカラガンやオオヒシクイはまだいませんでした。ハクチョウ類はコハクチョウです。カモ類はオナガガモが多く、ヒドリガモが多めです。ハヤブサ、チュウビ、クイナがいました。」(観察した当日) 「10月13日の蕪栗沼カウントの結果は、マガン約24,000羽、オオヒシクイ23羽、シジュウカラガン1羽、コハクチョウ12羽、カモ類4,964羽でした。好天で渡りが進んでいるようです。ねぐら入りは16:50頃から見頃でした。」そして観察会の2週間後、10月28日のカウント結果は以下の通り。「マガン約51,000羽、オオヒシクイ237羽、シジュウカラガン16羽、ハクチョウ類139羽、カモ類3,045羽。ツルシギ、ハマシギ、ヨシガモ、トモエガモがいます。」・・・なんとマガンは倍に、ヒシクイは10倍になったようです！



夕方ねぐら入りする雁の群れ。きれいなV字型の隊形も見られた。単独行、2羽グループ、若者グループ、家族など、様々なグループがある。



朝の一斉飛び出し。「一斉」と言われているが、実際にはグループごとに飛んだり降りたりを繰り返して、そのうち徐々に飛び立っていく。

1970年代からの保護政策、意識の変化などにより、マガン等の生息数は回復してきています。(以下、ぬまっこくらぶホームページから引用—1971年にマガン、ヒシクイ、コクガンが天然記念物に指定されたときには、狩猟の影響で、国内で数千羽しかガン類は残っていませんでした。それから少しずつ数が回復して、日本全体で20万羽前後になっています。そのうち8~9割が宮城県に集まります。)

近年の飛来数の増加には、日本国内、宮城県内での保護政策の影響だけではなく、むしろ繁殖地での温暖化の影響があるのではないかという見方もあるようです。たしかに冬は日本にやってきますので、越冬できる場所があることも重要なのですが、繁殖地の環境変化があるとすれば、より大きな影響があると考えられます。環境省は1970年から冬季のガンカモ類の生育状況を取りまとめた生息調査の結果を公開しています。第1回調査の1969年と、2016年の飛来数を表にしました(表-1)。

右図(図-2)は、東北地方における主な渡りルートをもとめた図です。栗駒山南部で奥羽山脈を越えるルートが蕪栗沼周辺で見られるガン類の主な渡りルートなのだそうです。シベリアまで遠い旅をする鳥たち、彼らと未来を共有していくような社会であつたらよいな、そのような生活をしていきたいものだと思いました。

今回は本当に貴重な体験をさせていただきました。ぬまっこくらぶの戸島さん、ご一緒下さった石井さんはじめ参加者のみなさんに御礼申し上げます。

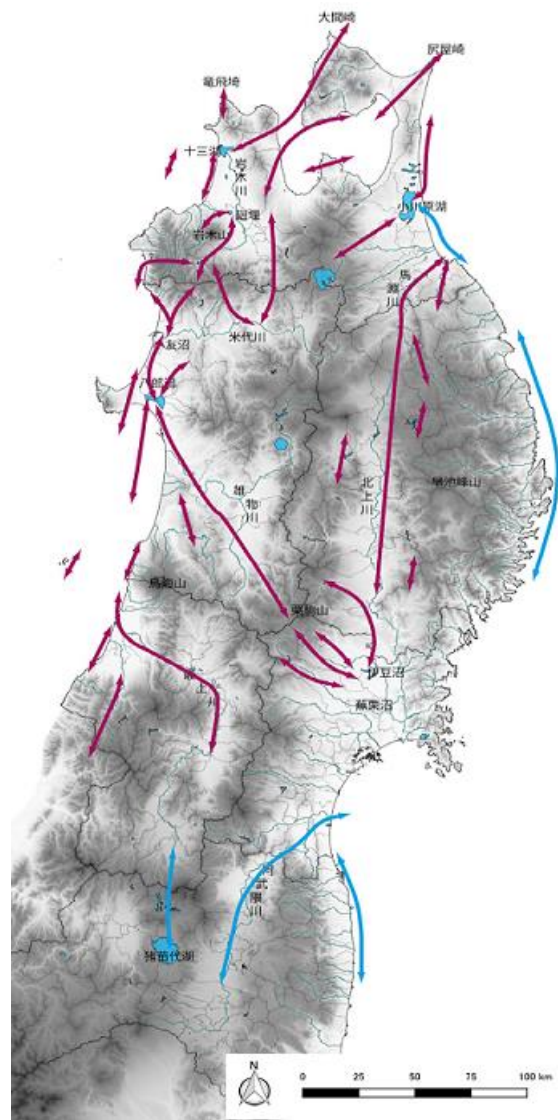


図-2 東北地方におけるハクチョウ類・ガン類の渡り状況(引用-1)

表-1 ガンカモ類の生息調査より抜粋(環境省)

調査について：毎年1月中旬に都道府県の協力を得て、過去の調査結果、鳥獣保護団体等からの情報に基づき、ガン・カモ・ハクチョウの原則としてすべての渡来地の中から調査地を定め、調査地ごとに調査員を配置して種ごとに個体数を調査し、環境省がとりまとめている。

		宮城県	全国合計		宮城県	全国合計
ハクチョウ類	昭和44年	1,417	11,637	平成28年	14,914	67,925
ガン類	昭和44年	2,284	5,565	平成28年	169,290	191,471
カモ類	昭和44年	15,919	1,008,311	平成28年	41,983	1,587,860

(環境省 自然環境局 生物多様性センター資料より作成)

引用-1, 環境省(2015年)平成26年度風力発電施設に係る渡り鳥・海ワシ類の情報整備委託業務報告書,
https://www.env.go.jp/nature/yasei/sg_windplant/post_90.html